

# 感想文について

(実学年 4年生 5年生 6年生 のみ提出)

今回のテーマは、「マナーキッズ大使」海外派遣と「佐藤次郎」です。

添付の原稿用紙にゼッケン番号、チーム名、名前を必ず書いて下さい。

- ・ 字数は800字以内で、縦書きです。原稿用紙は必ずホッチキスか、のりでとめて、
- ・ 12月6日(金)までに、下記へ送付してください。  
166-0002 東京都杉並区高円寺北3-22-3 デルコホームズ4階  
公益社団法人マナーキッズプロジェクト事務局  
全国大会感想文係宛
- ・ チームまとめて送付、個人で送付、どちらでも構いません。
- ・ 原稿はおらないで下さい。
- ・ 4・5・6年生の方で、未提出の方は、大使選考対象外となります。

## 「マナーキッズ大使」海外派遣と「佐藤次郎」

公益社団法人マナーキッズプロジェクトは、「マナーキッズ大使」数名を海外に派遣しております。マナーキッズ大使は文部科学大臣杯マナーキッズショートテニス全国小学生団体戦において、試合結果、マナー、感想文を勘案して選抜されたそうです。「マナーキッズ大使」のアイディアは我が国テニス界が生んだ最も偉大なテニス選手「佐藤次郎」からヒントを得たとのこと。また、錦織圭選手が全米オープンテニス準優勝、全仏オープンテニスベスト8という快挙の度に、佐藤次郎のことがテレビ、新聞に大きく報じられております。佐藤次郎という人についてみなさんはどのようなことを知っていますか？

佐藤次郎は、明治41年(1908年)群馬県群馬郡長尾村夏保(今の渋川市横堀)に生まれました。長尾小学校に入ると間もなく、兄とテニスを始めました。小さい板をけずってラケットがわりにし、自分の家の庭で、一人の時は家の壁を相手に練習をしていました。学校にはラケットがあり、三、四年生のころは、兄と二人きりで、放課後だれもいなくなるまで練習していて、先生に注意されることもたびたびあったそうです。しかし、上級生や先生たちが相手をしてくれることもあって、力がめきめきついてきました。そのうち、上級生も先生も歯が立たなくなりました。

ほかの運動も得意でしたが、勉強もがんばり、一年から六年まで抜群の成績で、クラスの友達からの信頼も厚く責任感も強いので、毎年学級委員をするほどでした。

その後、渋川中学(今の渋川高校)に進学してテニス部に入りました。校庭は軽石がごろごろしていて、まともなテニスコートがありませんでした。そこで、コート作りをすることになりました。

とてもきつく、部員にとっては最もいやな仕事でした。しかし、入部してすぐに正選手になった次郎は、中心になってこの仕事に取り組みました。コートの土をふるい、学校近くの工場から石炭がらをもらってコートに敷き、さらにローラーを借りてきて、コートを固めました。こうしてできあがったコートは、日曜も休日も、毎日使えるようになったそうです。

また、練習をすると決まった日は、たとえ雨でもコートに出かけ、ほとんどの部員が休んでいるのに、彼一人他の部員が来るのを待っていたそうです。「約束というのは、何人かの人の間で成立するもので、一人の身勝手な判断から遅刻したり、休んだりではできない。」というのが真面目な次郎の考え方でした。

次郎は『弱きを助け、強きを敬う』という言葉が好きでした。彼の高度なテニスの技術は、外国の強い選手から学んだものでした。さらに『勝利は技術だけではとれない。全人格でとるのだ』と考え、より高い目標を立て、それに向かって強い意志と実行力で取り組みました。彼のテニスは、みるみる進歩したそうです。

次郎の技術の高さに加え、コートマナーの良さは外国の人々にも高く評価され、新聞でも取り上げられました。外国で地元選手と試合をする時にも、外国の観客の多くが、次郎を応援しました。そのころの日本は、まだあまり世界に知られていない国でしたが、次郎の活躍は、外国での日本の評価を高め、多くの日本人に勇気を与えました。

昭和五年、フィリピンのカーニバル大会で優勝し、そのときの優勝カップが「佐藤次郎杯」として寄贈され、今でもその大会が渋川市で行われています。また、その年には日本チャンピオンになり、世界タイトルを目標に、ヨーロッパに日本代表の一員として戦いました。ドイツを破り日本がベスト4に入る原動力になりました。彼はその結果、世界ランキング三位(1932年)という記録を獲得し、日本中がわきたちました。この記録は、日本人の史上最高の記録として、今でも破られてはいません。

みなさんも、佐藤次郎のように、勉強、スポーツ両面で努力し、立派なマナーを身につけ、「マナーキッズ大使」になるよう、挑戦しましょう。

佐藤次郎母校 群馬県渋川市立長尾小学校 「道徳」教材を参考に作成